

児童文学の誕生

明治の幼少年
雑誌を中心に

続橋達雄 著

つづき はし たつ お
続 橋 達 雄

1928年 東京に生まれる。
父の転勤により、山形県・福島県で育つ。
1951年3月、国学院大学国文科卒業。
現在 国学院大学栃木短期大学講師。

<著書>

『宮沢賢治・童話の世界』 桜楓社 1969年

<論文>

「賢治文学の習作期」(筑摩書房『宮沢賢治研究』1969年)・「児童文学の流れ」(新評論『近代日本の児童文化』1972年)・「おとぎばなし集『赤い船』論・序説」(小川未明の『牛女』をめぐって)「童話集『赤い蠟燭と人魚』の一考察」(野州国文学)その他。

<現住所>

千葉県松戸市大橋 480—9

省 検
略 印

児童文学の誕生——明治の幼少年雑誌を中心に——

昭和四十七年十月一日 初版印刷	著者 続橋達雄	発行者 及川篤二	印刷所 錦第一印刷所	101 東京都千代田区猿樂町二二一六	定価一八〇〇円
				(電話) (〇三)二九一五六六一	
				(振替) 東京 一八〇二〇	

は し が き

最近、一般に児童文学への関心が次第に深まっている。創作・翻訳は活況を呈し、評論と研究もまた、少しずつ盛んになって来ている。入門書や評論・研究書の相次ぐ出版は、その端的な現われであろう。一般文学研究書にも、僅かながら児童文学に論及する傾向が見えはじめた。

とはいえ、率直に言つて、児童文学の研究はその緒に就いたばかりである。特定の作家や作品の研究、『赤い鳥』誌を中心とする諸問題の考察など、意欲的な検討が試みられ始めてはいる。鳥越信著『日本児童文学史研究』(一九七一・二)における主要作家の年譜・著作目録の整理という基礎的作業の労作も生み出されている。また、歴史的意義を担う作品集の復刻も少しずつはじめられた。しかし、基礎となる資料の蒐集整理は九牛の一毛に過ぎず、児童文学研究史の体系的整備、研究の方法論に関する吟味検討その他、ほとんど手がつけられていない課題はあまりにも多い。作家・作品研究の積重ねは、基礎資料整備と研究方法への反省吟味とに裏打ちされて、精確で充実したものとなり、児童文学の研究を着実に進めることになるう。

さて、本書は、一八九〇年前後の幼少年雑誌類を中心に、明治児童文学誕生の経過を問おうとする。これについては、木村小舟著『少年文学史・明治篇』(一九四二)が豊富な資料を引用して解説。本書は、多くの点でその恩恵に浴している。そこには、少年雑誌記者として活動した著者の多年にわたる体験の裏づけがあり、示唆に富む見解がちりばめられている。惜しいことに、現象面の推移を追うのが精一杯というところである。これは、日本童話協会編『童話史』(一九三五)でも同じであった。次いで、菅忠道著『日本の児童文学』(一九五六)が、一八八〇年代から今日

に至るまでの全体的展望の中で、「少年文学の誕生と成長」(第二章)を扱っている。ここでは社会科学の立場から照明を当て、社会史的背景と明治児童文学成立との関連を詳論している。さらに、鳥越信著『日本児童文学案内』(一九六三)は、日本児童文学の流れの中で、明治児童文学の誕生を、「教育理念追求の時代」「資本主義的経営に即した児童出版はじまる」との項目を立てて浮彫りにしようとする。『日本の児童文学』と『日本児童文学案内』は、『少年文学史・明治篇』には欠けていた方法論に支えられており、現在までのところ、これを越える著作は出ていない。滑川道夫著『児童文化論』(一九七〇)が、そのはばをひろげたと言えようか。ただ、上述の諸著には通史的制約があり、明治児童文学誕生についての詳細な論考は無理であった。

明治の児童文学は、幼少年雑誌に文芸欄が設けられたことで誕生の機を迎え、次いで叢書形式による単行本の出版がこれと平行して次第に成長したもの、とわたしは見る。このため、幼少年雑誌類の刊行を促した要因、そこに内在する基本的性格、雑誌全体の中に占める文芸欄の位置とそれを支える文芸観、などが、問われなければならぬ。その究明の過程で、明治児童文学誕生の契機と、当時の児童文学を内側から規制し特徴づけた基本的要素とが鮮明になるはずである。本書は、このような問題意識によってまとめられた。

序章と第一章は、少年雑誌の先頭に立った『少年園』、第二章と第三章では、それぞれ『小国民』と『幼年雑誌』の文芸作品、第四章で叢書「少年文学」を検討、ここまでの時期を幼少年雑誌の創始期と名づけた。第五章は、創始期から次の展開期への道を開くことになった『少年世界』第一巻の文芸作品を概観している。いちおう、原典に当たって問題点を幾つか整理し、それが遠く一九二〇年代にまで尾を引いていることも示唆した。

ただ、目録し得た雑誌類が少ないこと、『女学雑誌』に代表されるキリスト教系統の人たちの活動や、大日本教育会の動向などに調査が及ばなかったこと、方法論上の試行錯誤が続いたこと、など、未熟で粗略な考察にとどま

ったことはわたし自身痛感している。さりながら、明治児童文学の誕生といえは鍵山人の『こがね丸』だけで万事終れりとしがちな現状において、本書がその研究の前進に少しでも寄与するところがあれば、たいへん辛いである。

児童文学の誕生
目次

序 章 二

第一章 『少年園』の巻頭論説 三

第一節『少年園』出版の目的 21 第二節雑誌の構成と論説 26

第三節天皇制国家の賛美 28 第四節明治社会の現実 31

第五節立身出世主義 33 第六節少年の進路 34 第七節学校

生活への助言 38 第八節文体論と文芸観 41 第九節女子教

育論 49 第一〇節編集者の自負 52 結 59

第二章 『小国民』の文芸作品 六

第一節『小国民』の誕生 61 第二節雑誌の構成 64 第三節

文芸作品の分類 69 第四節翻訳と翻案 72 第五節純創作も

の 80 第六節文芸作品の整理 98 第七節言文一致体のこと

100 結 103

第三章 『幼年雑誌』と巖谷漣山人 一〇六

第一節『幼年雑誌』の出版 106 第二節編集方針 108 第三節

第一巻の内容 111 第四節第二巻から第四巻まで 126 結 147

第四章 叢書「少年文学」の概観 一四九

第一節叢書刊行の目的 149 第二節叢書の構成 152 第三節

『こがね丸』をめぐる問題 156 第四節文芸もの——文語体の作品—— 166 第五節文芸もの——言文一致体の作品—— 166

第六節歴史ものの作品 174 第七節問題の整理 182 結 188

第五章 『少年世界』の登場……………一九二

第一節博文館の新企画 191 第二節『少年世界』の構成 193

第三節『少年園』『小国民』の発行停止事件 196 第四節漣山人の作品 200

第五節△小説▽△幼年▽欄の作品 206 第六節付録の作品群 215

第七節△少女▽欄の作品 219 第八節△雑録▽欄の作品 224 結 227

終章……………三〇

付論

その一 『中学世界』覚え書……………三三

一『少年文集』のこと 236 二『秀才文叢』について 237

三北隆館の『少年倶楽部』 239 四『中学世界』の発刊 241

五雑誌の構成 242 六巻頭論説から 244 七新体詩と紀行文 247

八投書から 250 結 256

その二 巖谷小波研究ノート 二五七

一「一 珍可笑夢」——習作期—— 257 二硯友社への参加——文

学開眼—— 265 三『妹背貝』——文壇への進出—— 270 四「秋

の蝶」——その小説の特質—— 275 五お伽噺作家への転機 279

六お伽噺作品群の概略とその特徴 283 七桃太郎主義 288 結 300

あとがき..... 三〇二

児童文学の誕生

——明治の幼少年雑誌を中心に——

序 章

明治二十年の二月、雑誌国民之友出で、政論雑誌界に、清新の空気を吹込みたると同じく、少年園出で、少年雑誌界に新味の典型を示し、こゝに進歩の一線を描けり。／＼発行人山県順は、山県悌三郎氏の父にして、唯名義人たるに止り、実は悌三郎氏の発行なり。⁽¹⁾

とは、一八八八年（明治二一）一月、山県悌三郎の創刊した『少年園』に対する石井研堂の回想である。石井研堂は、『少年園』の翌年に刊行された『小国民』誌の編集に携わった人であり、この回想は、『少年園』創刊当時の印象を述べたものと言えよう。

平民主義を標榜して登場した徳富蘇峰の評論雑誌『国民之友』（一八八七・二—一八九九・八）は、憲法発布をその翌年に控え、未来社会のあるべき姿を模索していた当時の青年たちを感激させ、社会の人たちに深く大きい影響を及ぼした。『少年園』は、それに匹敵するほどの清新さをもって登場し、少年雑誌界のエポック・メイキングになったというのである。後年、博文館の幼少年雑誌の編集に従事した木村小舟も、「蓋し『少年園』は、明治少年文学の揺籃時代に当りて、新鮮潑刺たる気分を横溢せしめ、恰もこれと相前後して出でたる徳富蘇峰の『国民の友』⁽²⁾が、遽然として政治言論界に雄飛し、断乎として一世を風靡するに至りしと、好一對の新現象と見るべきであらう」と述べている。さらに、『少年園』の愛読者として成長した河井醉茗は、「その頃教育、政治、文学等に関する好い雑誌がそろ／＼出かけてゐたけれど、われ／＼少年のためにといふので非常な悦びを感じ、良いもわるいもな

く『少年園』にくひついた。まもなく『少国民^イ』が出たけれど品格が劣り、やがて博文館からも『幼年雑誌』が出たけれど雑誌で引き締つてゐない。それに比して『少年園』は程度が高く、御機嫌取りの記事は一つもなかった。知識欲に燃えてゐる少年には恰好の課外教科書でもあつた。何処となく雑誌全体に西洋味の交つてゐたのも目新しく感じられた。私などが初めて新体詩といふものに興味を持つやうになつたのも『少年園』を読んだからである。その他文学ばかりでなく自然科学の話などでも啓発されるところが多かつた⁽³⁾と言ふ。かつての愛読誌に対する身びいきめいた匂いがないとはいえないが、熱中して読みふけた姿がしのばれよう。

石井研堂は、『少年園』創刊以前の少年雑誌として、『新聞小学』(一八七五)・『学庭拾芳録』(同前)・『顕才新誌』(一八七七)・『小学雑誌』(善誘社・一八七九)・『小学教文雑誌』(一八七九)・『小学雑誌』(修正社・一八八二)・『小学作文新報』(一八八五)などを挙げ、それぞれについて簡潔な説明をしている⁽⁴⁾。それによると、投稿誌として一八九〇年代の後半まで命脈を保った『顕才新誌』を除き、いずれも刊行期間は短かつたらしい。また、『新聞小学』が「貞婦忠僕等のみを集録」し、修正社版『小学雑誌』が小学校の教師と生徒とを対象にするなど、さまざまの試みがなされたものの、『顕才新誌』以下小学作文新報に至るまで、少年雑誌と言へば必ず少年の作文に関したる雑誌なり、当時、作文を以て、生徒の学力を審定する標準と為し、作文これ学力たるが如き観のある雑誌にすぎなかった。

そこへ、「漸く作文練習本位の旧套を脱却して、学問、修養、娯楽等の健全なる記事に其の重点を置き、而も当代知名の大家の寄稿を求めて、誌面の大部分をこれに充て、僅かに一少部分を少年の投書に割きて、恰も今日行はれつゝある者に庶幾き、斬新の体裁を具ふるに至つた⁽⁵⁾」という『少年園』が登場したのである。課外読物を渴望していた「知識欲に燃えてゐる少年」たちが、期待に胸ふくらませてこれをよろこび迎えたのは当然であらう。義務教育を受けた少年たち、すなわち、安定しつつある明治社会の少年たちにふさわしい雑誌が、ここに誕生したのであ

る。少年たちの読物に関心をもっていた人たちの眼に、それが「新味の典型を示し、こゝに進歩の一線を画せり」と映じたのも自然であつた。

そればかりではない。『少年園』の登場以後、『日本之少年』（一八八九・二）・『こども』（一八八九・三）・『小国民』（一八八九・七）・『少年文武』（一八九〇・一）その他、幼少年雑誌が次々に発行されることになる。しかも後続のそれらの諸雑誌は、雑誌の編集や記事の内容などについて範を『少年園』に求め、陰に陽にその影響を受けていたのである。この意味でも、まさに「新味の典型を示し」と言えよう。

さらには、『少年園』の文芸欄が、後続の諸雑誌のそれを含めて、明治児童文学・少年少女文学育成の一つの母胎となっていく。明治児童文学の展開をみるうえで、幼少年雑誌の果たした役割は計りしれないものがあるが、その口火を切ったのは『少年園』である。

あれこれ含めて、『少年園』の出版は、まことに画期的な意義をもっていたのである。そして、この『少年園』以後、一八九五年創刊の『少年世界』以前までを、わたしは少年雑誌の〈創始期〉と呼ぶことにしたい。この時期にふさわしい特徴があり、次に続く時期への地ならしの役を果たしていると思われるからである。

さて、『少年園』創刊の一八八八年は、「小学校令」制定の二年後、教育勅語渙発の二年前にあたる。「学制」以後のぐらつきをみせていた明治政府の教育行政が安定し、その基礎を固めていた時期である。これは、〈創始期〉の少年雑誌を検討するさい、けっして見逃せない。山県悌三郎が、こうした時に新しい少年雑誌を刊行したのは何故か、それは〈創始期〉の少年雑誌をどう特徴づけていくか。

ここで、山県悌三郎の略歴に沿い、明治政府の教育行政の一端に触れながら、『少年園』誕生に至る経過をたどってみよう。山県については、塩田良平「山県悌三郎評伝」（『季刊明治文学』4・明治文学会編）を参照した。

山県悌三郎は、一八五八年（安政五）十二月、近江水口藩邸に生まれた。明治維新の一〇年前、彦根藩主井伊直弼が大老となった年である。明治の児童文学に大きな功績のあった巖谷小波も、その父巖谷修は水口藩の出身である。幼少年期の山県は、一般の士族の子弟と同じように、四書五経などを中心とする経史講読のうちに過ごし、数え年の一三歳で藩校翼輪堂の授読副員、『論語』や『日本外史』の一節を藩主の前で講述したこともある。漢詩は苦手だった。

一八七二年（明治五）上京。育英義塾、東京英語学校（高等中学の予備校）を経、一八七六年、高等師範の生徒募集に応じて入学。かたわら東京書籍館（帝国図書館の前身）で外来の自然科学書を読みふけり、一八七八年（明治一一）高師を卒業。埼玉、宮城県での教職を経て、愛媛師範学校の教頭から校長となった。たまたま巡視に來た西村茂樹のすすめで文部省御用掛となり、学習院講師を兼ね、修文館での大木喬任・森有礼の秘書役もつとめている。しかし、欧州留学の希望は容れられず、学習院教授への道も閉ざされていることを知り、下野してしまふ。一八八六年（明治一九）、数えて二九歳であった。

以後、『理科仙郷』『進化要論』『教育哲学史』などの著作出版、教育雑誌『学海之指針』刊行、教科書『小学日本歴史』の著作出版と、それぞれの方面で社会の注目を浴びる業績を残し、博物学および教育学の先達の一人として、名を馳せるに至った。このような仕事の延長・一環として、『少年園』は誕生することになる。それは、『小学日本歴史』の出版に遅れること七か月であった。

こうした山県の経歴を辿ってみると、明治政府の教育行政の流れと、微妙な関連のあることに気がつく。かれの上京した一八七二年は、『学制』・「太政官布告第二一四号（被仰出書）」の出た年にあたる。明治政府が、新時代にふさわしい義務教育の精神を表明し、その制度づくりに手がけた時である。「被仰出書」に現われた指針は、「空理虚